

マカオの印象

鈴木陽子

香港の南西64km, 珠江河口に位置するマカオ—澳門—は、1557年のポルトガル人の定住以来、ポルトガル領（正式の占有・支配は1887年～）植民地として400年を経てきた。この渋谷区ほどの面積、人口42.5万人の土地が、かつてはゴア、マラッカと共にポルトガルのアジア貿易の基地として、特に中国と日本との中継地として重要な役割を果たしたことは歴史に見る通りである。なかでも、西欧の近代科学がマカオを通して中国へ入り多大な影響を与えたことは、同じ植民地となった香港と異なる点と言える。又、江戸幕府のキリスト教禁止令によって逃れた信者達が、マカオに渡りセントポール天主堂の建設に協力した話も夙に知られている。

昨夏マカオに立寄る機会があって、そこで垣間見たのは、其所此所に歴史の片鱗を残して一種ノスタルジックな、そして一世紀も前に時間が止まってしまったような街の景観であった。

マカオは、広東省珠海市と細い陸地で繋がった澳門半島と、橋で結ばれた2島から成る。半島部は、国境から南端まで凡そ4kmしかないのにその間に7つの丘陵があり、どこへ行くにも坂が階段を上り下りしなければならない。日本から行く場合香港を経由して行くので、「香港・マカオ」と一括りで語られることが多いが、香港とはまったく対照的である。高層ビルが立並び、道路いっぱい車の走る香港は、いかにも経済活動の中心地であり、大都会風である。それに対して、ジェットフォイルで一時間弱のマカオは、南欧の田舎町といったのんびりしたムードの漂う街である。人口の96%は中国人であるから、街で見かける顔も中国人、話し言葉も中国語ばかりで、期待したような欧風の街並もあり続かない。

最も植民地らしい景観と見えたのは、半島南端の丘陵上の総督邸付近から、海岸沿いのホテル・ボウサダ

・デ・サンチャゴにかけての一带である。コロニアルスタイルの邸宅が並び、海岸沿いの道路には立派なガジュマルの並木が続き、夜は沖合のタイパ島と結ぶ橋のアーチに点るライトの列が美しい。このホテルは、16世紀に造られたバラ砦を利用して建てられており、砦の入口から大きな石の間の階段を登って南欧風のロビーに出るようにつくられている。香港も亜熱帯に属するが、マカオの方が丘陵地形が多く、建物も少ない分亜熱帯植物を見ることが多い。

マカオは、19世紀前半、本国の衰退と香港の英領植民地化によって、次第に貿易の中継地としての地位は低下した。現在では、人口で香港の1/10以下、国内総生産で1/40に過ぎなくなっている。現在経済を支えているのはギャンブルを含む観光業である。有名なカジノは公認が4ヵ所あるが、最大のものはリスボアホテルの地下にあり、24時間営業している。入場無料で、18才以下入場禁止という規則があるが、それも顔つきを見て決められるから適当である。気軽に入って見物しているだけの人も多い。賭金もゲームによっては1香港ドル（約17円）からなので、少額でも充分楽しめる。（深入りさえしなければ）欧米のカジノを知らないので比較出来ないが、特別な所という雰囲気ではなく、やはりマカオ的である。週末には香港から沢山の人が訪れ、それがマカオの財政を支えているという。

同じ広東人であっても、マカオでは香港に比べて人柄も素朴であるし、商売の仕方・町を歩く姿等ずっとのんびりしているように見える。それは、この2つの土地の歴史的背景と、現在の経済的立場の違いによるものが大いに関係しているのだろう。1997年、1999年の香港とマカオの中国返還後はどう変わっていくのだろうか。今は、豊かさはないが、どこかほっとするような気分、時間の流れがどこよりもゆったりしているような印象を与える土地である。